

様式第 2 号

視察研修先	北海道富良野市議会	氏名	木 村 寿太郎
視察研修項目	ふらの版 DMO による地域密着型観光の推進について		
<p>富良野市は北海道のほぼ中心に位置し、上富良野・中富良野・南富良野・美瑛の各町、そして占冠村の一市四町一村の北海道の代表的な観光地であり、当然全国区でもあり、広域観光の発祥地でもあり、それを富良野市がリーダーシップを取っているとのこと。</p> <p>国立公園、自然景観、展望台、遊水地など、数えきれないほどの大自然や楽しい風景が味わえる、日本を代表する自然スポットでもある。</p> <p>個人的にも 3 回目の訪問である。</p> <p>(1) ふらの版 DMO による地域密着型観光推進について</p> <p>観光庁の資料によると「日本版 DMO」とは、観光物件、自然、食、芸術、など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域づくりを、行う法人組織である。</p> <p>①日本版 DMO (10 件)・②地域連携 DMO (69 件)・③地域 DMO (57 件) の三分類され、合計 136 件に達している。富良野市は②該当している。</p> <p>富良野市の観光の歴史は、1981 年から 2002 年までに」放映された脚本家倉本聡氏によるテレビドラマ「北の国から」が連日視聴率が 30% を超える大ヒットし、富良野の位置付けをしてくれた。また Web では、雄大な自然に満たされた「よそ者からの視点」が発見され、リピーター体験者がおおぜいの観光客として訪れ、そのすばらしい素材の新しい発見として日本中に大ブームを起し、富良野地区が一躍「ズームイン」された。</p> <p>地元の自然が身近な観光として再発見された事が、地元民を奮い立たせた。</p> <p>その後も「スキーブーム」や「自然にあった花の愛され方」を富良野が全国的にアピールしてくれたようなものであり、当時は大絶賛を浴びたとのこと。</p> <p>さて、今後はこのように人口減少が進み、まず、その労働力をいかにして確保し、将来の方向性と課題を解決していかなければならない訳で、市の意向としては「オールシーズン滞在型観光」を目標に持続可能な観光地づくりを目指さなければならぬとおっしゃっていただきました。</p> <p>それには次のような課題を挙げておりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>イ) 循環型 (今後もしリピーターが何回でも訪れ、回遊しやすい、富良野の景観を次世代につなぐ)</li> <li>ロ) 富良野ライフスタイルの提案 (住民が地域を楽しめる)</li> <li>ハ) オフシーズン対策⇒雇用安定化⇒観光産業化に結び付ける</li> <li>ニ) 持続可能な財源を確保し法定外目的税「宿泊税」の獲得を検討する。</li> </ul> <p>などが重要であるとの説明を頂きました。</p> <p>全国的に見ても「観光」と一言で言うが、なかなか現在は課題が多すぎるが、共通の悩みは数多くあり、環境や歴史を売りに出すのがどちらかというとブームになっているが、産業面もパッとしないし、「観光」でもやるかという簡単な問題でもないし、これからは広域的</p>			

におこなわなければならないのは確かと思っている。

山形県内にもDMOに認定されている市町村がいくつかあり、未だ新しい戦略法であり、その対応や効果を十二分に再調査し、構築することが必要と考える。

様式第2号

視察研修先	北海道富良野市議会	氏名	木村 寿太郎
視察研修項目	民間を主軸にした官民協働による複合的中心市街地活性化事業について		

平成18年、市の中心に在った地域拠点病院の移転が街並みを大きく変化させた。毎日、数多くの住民が集まる場であったが、無くなることはコミュニティの場を失うに等しい訳で、もちろん中心街にとっても大きな打撃であった。そんな中で東京で活躍されていた一人の青年が地元に戻り、びっくりし、「病院の跡地利用はノープランらしいぜ。何とかしなければ、おれたちで何とか考えよう！」ちょうどまちづくり三法が改正され、タイミングも良かった訳である。これ以上中心市街地が衰退したら市の存続も危うくなると市商工会員を中心に立ちあがった。まちづくり会社を作り、それを中心市街地活性化に結び付け、収益を上げようと、国の補助金や制度資金の受け皿となった「まちづくり会社」が設立された。

資本金は1035万円で始まったが、資本増資の必要性に迫られたが、市には増資を求めず、商工会議所会員を中心に64の企業・団体・個人から出資を受け、8350万円に達した。

商工会議所役員で経営責任を持つ体制づくりも出来た。

その跡地利用に何を核として市街中心地に観光客を呼び込めるか、だいた議論を重ねたが、富良野には京野菜を上回るイメージがあり、さらに牛乳・乳製品・ワイン・ソーセージなども全国的に常連であり、「食」をテーマにすれば賑わいの拠点になるに違いないという構想が出来上がった。ネーミングも「ふらのマルシェ」に決定した。平成22年に4月にオープンし「ちょっとおしゃれないなかまち」というコンセプトで誕生した新スポットは観光客のこころをがちりつつかんだ。年間30万人を目標にしたが1年目で55万人を超え、3年目には70万人も超え、一番にこだわりを入れた「広場」も大好評である。

次のステップとして新たな計画を考え、平成27年にはマルシェ向かいにマンションと公共施設が合体し、高齢者の介護付き住宅・クリニック・保育園などを付設した7階建てマンションを完成させた。その1階には「マルシェパート2」も完成しており、そこには強いリーダーシップを持つ人や目標に向かって一心同体の強い絆を感じ、これが民間の活力である。

新しいマルシェの関連雇用・経済効果・消費効果や、一番顕著に表われているのが路線価が対前年比2.7%、過去6年間の上昇額が9,000円(1㎡)、上昇率が31%にもあがっており、市のイメージアップに大きく貢献している。人口減少が大きくクローズアップされている中で、将来的にこの結果を見れば、市民の意識も高揚していくのではないかと想像されます。

本市と比較すると、地域や環境に相違はあるが、将来的に参考になる部分は、多くあると考察する。

様式第 2 号

視察研修先	北海道上川郡美瑛町議会	氏名	木 村 寿太郎
視察研修項目	廃校を活かした取り組みについて		
<p>美瑛町は北海道のほぼ中心に位置し、明治 27 年に兵庫県人小林直三郎が入植し、120 年を迎え、昭和 62 年に写真家前田真三氏が「丘のまち美瑛」を宣伝し、農業美観の美しさを高く評価され年間 226 万人もの多くの観光客が訪れるようになった。</p> <p>いまさら言うまでもなく、富良野市・南富良野町・中富良野町・上富良野町・占冠町一市 4 町一村での広域観光は全国区であり、特に外国人の観光客の多さは高い評価を受けている。</p> <p>しかし少子高齢化の波も当然やってきているわけで、人口も昭和 35 年をピークに現在は 55% くらい減少し、この 3 月にはついに町の人口が一万人を割れ、9965 人になってしまった。当然小中学校数も減ってきており、平成 46 年には小学校が 24 校、中学校が 7 校あったのが、廃校がどんどん進み、現在は小学校が 5 校・中学校が 2 校になってしまった。</p> <p>過疎地域における小中学校は、単に教育施設としてだけでなく、地域コミュニティの中核施設として役割を担う、貴重な公共的財産である。町民にとってはなじみの深い施設であり、町民が足を運びやすく、交流しやすいことから活動拠点としてふさわしい訳です。廃校となった学校校舎は、教育財産から普通財産に移行なるわけで、地域再生事業制度を活用し、地域のために民間に新たな施設としてご利用いただくのが最善策であるとおっしゃっていました。</p> <p>そんな観点から、北瑛小学校の活用事例を拝見することができました。施設の名前も「小麦の丘体験交流施設」と、まさに美瑛町の「丘の美観」にふさわしい都会的な雰囲気でのレストランを体験することができました。平日の日中に 30 名くらいしか入館できない店内がほぼ満席でした。丘陵地帯のすばらしい美観だけで、なぜこんなに集客力があるのか、27 年間サービス業をやってきた私にはちょっと疑問に思いましたが、その裏には隠された秘密がありました。食事の後にシェフの斎藤さんと言う方とお話をする機会を得ました。札幌や東京にフランス料理の店を構え、ミシュランの星をもらった店を運営している方でした。やはり職人で、こだわりを持った方でした。原価計算もしっかりと捉え、お客さんも全国からいらっしゃるとのことでした。まだ開店し、3 年だけしか経過していないという事ですが、再会の名刺交換を行ってきました。本市においても、3 年前に閉校した学校もありますが、物の見方や考え方そして環境や地域も違っています。ベースは同じであると強く思ってきました。一人の人間としての目的を持ち続ける「思いの強さ」をご教授いただきました。</p>			

様式第 2 号

視察研修先	北海道千歳市議会	氏名	木 村 寿太郎
視察研修項目	千歳市防災学習交流施設「そなえーる」について		

千歳市は、石狩平野の南端に位置し、隣市には人口100万を抱える札幌市や苫小牧市などに接し、自衛隊が2つの駐屯地と航空自衛隊基地があり、自衛隊員とその家族やOBなどを含めると人口の約3割を占めている。その方々の影響もあるのか、防災などには非常に関心度が高く、活動にもいろいろと貢献度は高く、組織運営などにも積極的に協力・支援を頂いているようである。

千歳市防災学習交流施設「そなえーる」で研修をさせていただきました。

個人的には、平成23年頃、会派の視察研修で一度見学させていただきましたが、竣工して間もなくの時期であったが、周りは畑や田だけで建物らしきものも何もなかったと記憶していましたが、様相が一変しておりました。

平成17年度に、防衛省からの民生安定事業補助金というのがあり、総工費21億円の75%の補助率で「千歳市防災学習交流施設」が完成したとのことです。当然、自衛隊の2ヶ所の駐屯地や航空自衛隊基地があり、その危険度や安全性、住民への諸設備や安全生活を保証しなければならない交付税などの手当ても多く受けていると思われるが、その割合の大きさも当然かと思う。もちろん有事の際には、災害の拠点として機能を発揮することになる訳である。

「そなえーる」は、災害を「学ぶ」「体験する」「備える」をテーマに起震装置、煙避難装置、予防実験装置、避難器具などを備えた設備である。

平成18年から建設が始まり、22年に完成し、それから10年を経過し、見学者も全国から来場し、今年の5月に利用者は40万人を超えた。

一番の人気は「起震装置」で、ほとんどの方が体験するとのことです。

内容は「東日本大地震」の時の震度9の揺れ具合とか、「縦揺れ」「横揺れ」の違いとか、そういう体験をする事ができる設備でした。

昔から「災害は忘れたころにやって来る」と言われたものであるが、最近の日本列島は「毎月やって来る」と言われても過言ではない状況である。

本市でも毎年行われる「地区別防災訓練」を見ても、年々参加率が上がって来ているのを感じている。こんな立派な設備があれば、それに越したことはないが、最終的には「自分の身は自分で守ること」の大切さを実感している。